

大学院栄養生命科学教育部



疾患治療栄養学分野の新設 (メディカル・ニュートリション拠点の核)



世界的水準のメディカル・ニュートリション教育研究拠点及び若手研究者等を中心とする未来発達型研究拠点等の形成のため、研究教育体制を整備する。(第2期中期目標中期計画)

大学院栄養生命科学教育部では、栄養学を基盤とした教育・研究活動を通じて、人々の健康維持・増進に関わる人材を養成している。大学院博士前期・後期課程を修了した者は、食品・製薬企業、病院等の医療機関、大学関連の教育機関で全国的に活躍している。栄養学に関連した大学院博士課程を全国に先駆けて設置したことより、博士(栄養学)の学位を取得した者の数は全国でトップであり、そのため全国の管理栄養士養成施設で本学卒業生が活躍している状況を生み出している。大学院栄養生命科学教育部の母体となる栄養学科の歴史は、1964(昭和39)年に医学部に栄養学科(入学定員50人)が設置されたところより始まる。1969(昭和44)年には大学院栄養学研究科(修士課程入学定員14人)、(博士課程7人)が設置され、2012(平成24)年に新たな分野として疾患治療栄養学分野を設置、2014(平成26)年には栄養学科創立50周年を迎え、医学部栄養学科から医学部医科栄養学科へと改組

が行われている。また大学院改革では、医科栄養学科へと改組が行われたため新たに医科栄養学科卒業生に対応した教育体制を構築してきた。全国的に大学院の定員充足率が低い中、大学院栄養生命科学教育部は、博士前期課程および後期課程共にほぼ充足率を満たしている。最近の就職に関する新たな動向としては、従来は学部生の主だった就職先であった病院あるいは公務員に大学院前期課程を修了した学生が就職している点である。これは医療および行政においても高度職業人としての人材を求めていることを反映しているものと思われ、また大学院栄養生命科学教育部の研究活動が盛んに行われていることを示すものとして、全国レベルでの学会での受賞者が数多く見られることである。その受賞数は年々増加している。大学院栄養生命科学教育部は、地方大学ながら、全国の管理栄養士養成校あるいは栄養に関連する学会活動において揺るぎない位置にある。

